

詩集・梁性佑

冬の共和国

姜舜訳

皓星社刊

カン スン
姜 舜

1918年 江華島に生まれる。
著 書 『朝鮮部落』(朝鮮語詩集 1953年)
『もがり火』(♪ 1958年)
『姜舜詩集』(♪ 1964年)
『なるなり』(思潮社 1970年)
訳 書 『金芝河詩集』(青木書店 1974年)
『現代韓国詩選』(全5巻)
(梨花書房 刊行中)

詩集 冬の共和国

1978年 7月25日 第1版第1刷発行

著 者 梁 性 佑
訳 者 姜 舜
発行者 藤 卷 修 一

発行所 株式会社 皓 星 社
(〒 101)

東京都千代田区西神田3-1-3

電 話 ・ (263) 4 4 0 4

振 替 ・ 東 京 3 - 2 4 6 3 9

印刷・製本 温故堂印刷(株)

序 文

高^コ

銀^{ウシ}

いま、梁性佑^{ヤンソンウ}はわれらと共にいない。かれは、かれに負わされた役割のために監獄につながれている。

かれがソウル拘置所へ渡される直前に証拠物件にならない原稿の包みを、私は治安本部の司法警察官から正式に引き渡された。何時か、かれが解き放たれるときまで、かれの本など何枚かの衣類、そして緑豆將軍の肖像画のたぐいと一緒にそれを保管して置いて返すつもりでいた。

そのうちに、「これは本にして出してもよいのだそうです」という彼のことばが不意に思い浮かび、詩集にして出す考えが起きたのである。日頃、梁性佑と誼の深かった安載雄総務に逢ったら、かれの気持と私の気持がまたたく間に一致した。

この本の限定版にかかる費用がキリスト教の有志

のみなさまのお陰をもって満たされたことを大きな誇りとして感じざるをえない。編集と製作は趙泰一、林正男が引き受けて骨折ってくれた。

最後に言いたいことは時局の事情にかんがみ、かれの熱っぽい歌を探して収録できなかったのが残念だ。われらは彼を見送ったあとでも、このように妥協するほかない。

正義のエレジーを恨みと怒りで確認する男梁性佑はいまわれらと共にいないけれど、かれの心とわれらの心はこの本がなくとも絶えることなく交っている。かれは更に輝く詩人になるために、詩を中断した暗闇の生をそこへ入って生きているのである。

性佑よ、おまえのいない、肴のない酒を口の中へ投げこんでいる。

一九七七年初秋

自序

これらの詩を捨てることはできても、この大地を捨てることはできない。

これらの詩を捨てることはできても、ぼくは隣り人たちと隣り人たちの膚、隣り人たちの言葉と愛と溜息、そして涙を捨てることはできない。

これらの詩を捨てることはできても、われらが奪われた自由は取り戻さなければならない。

命なんぞは雑草のように生き返られるけれども、自由は貴いもの、これらの詩を捨てることはできても自由は捨てられない。

(註) この自序は著者が一九七五年十二月、かれの詩作ノートの始めの部分にかいて置いたものであることを明らかにする。

目次

序文	1
自序	3
カササギの声	10
たとえ山水甲山へ流さるるとも	13
ひと時がすぎれば	15
歌	17
おまえが故里を語るとき	19
鳥	21
ある日枯れた茎からも	23
いまは決して花でなくとも宜しかろう	25
漠々たる荒野に	28
空っぽの田畑に案山子として	30
さびた鎌を研ぎすませながら	33
斯くして	35
ことば	37
おろかな者よ	39

この拳で.....	41
鳥たちは虚空においても.....	43
影.....	45
この秋に自分の親父も祭れないのに.....	47
新郎が戸の外へ来て.....	50
おまえが赴いて語れ.....	54
石ころ.....	59
生きてるうちに見られなかった夢を.....	61
子供たちの質問.....	63
新版 両班の唄.....	65
涕いて行った人よ.....	70
風.....	74
すぎた夜にも隣の戸を叩く音が聞こえてきて.....	75
黒石洞日記.....	81
光州へ来て.....	83
帰って来て寝る夜には.....	85

毛	87
いまは荒海	90
北漢江	92
作男という鳥	94
ソウルの砂粒	96
銃	98
外着を売って	100
棍棒の山河	105
屑っ葉	113
四月の回想	115
夏日有感	119
ぼくの生きてるのが過ちでないのなら	121
悪魔がわたしを	124
柩を担ぐひとたち	126
紅葉	128
どこかに天地の間をとどろかす太鼓があつて	130

水没地区……………	132
冬の共和国……………	134
ナロード頌……………	141
日毎参らせ給え……………	143
上京記……………	149
ソウル駅で……………	151
わたしが死んで……………	153
つつじ……………	155
光州の姉……………	157
竹葉をわたる音……………	159
何が見えるのか……………	161
智異山の唄……………	172
跋 文……………	181
訳者あとがき……………	186
梁性佑年譜……………	188

冬の共和国

カササギの声

一匹の蜘蛛と　そして小さな

火取虫、身じろぎもしないで抗う

蠅っ仔にいたるまで

ぼくがいとおしむようになったことを

よろこびながら

朝になると飛び上がらんばかりに驚き

カササギ⁽¹⁾の啼く声に耳をそばだてる。

ひとえに囚われてるからだけではなく

眼にみえないからなのかも知れないけれど

朝になると斯くもすべてのものが

みたくてたまらなく、

もしかしたらこの世の末期を

生きているのではないかと訝るわけは

ぼくがまだ

世間をよくは知らないためだろうか。

ほんやり居座ったままでも

夕暮は来るけれど

あかつきに啼くカササギの声ぐらい

ぼくを生け捕りにし

砕けんばかり抱きしめたいものたちに

出逢うために

ぼくが此所へ

来たのだとは言えないにしても

埃にまみれた蜘蛛の巣や鼻をつまませる小便臭さまでが

涙がこぼれるほどにも愛するようになったことを

よるこびながら

朝になると飛び上がらんばかりに驚き
カササギの啼く声に耳をそばたてる。

- (1) カササギ(鵲)——韓国に多く生息する鳥の一種で腹の部分が白い。吉鳥とされ、朝方カササギが啼くと吉兆だと
よろこばれている。

たとえ山水甲山⁽¹⁾へ流さるるとも

黄龍江⁽²⁾の河底にかなしみを埋め

親父たちも長城⁽³⁾の蘆の嶺を越えたのだから

どうして空家で布団をかぶり

踏みつけられた胸ばかりいたわっていられよう

たとえ三水甲山へ流さるるとも竹槍を突らし

襲降る中とはいえ起ち上がり叫ばなければならぬ

一生をとおして夢路にも来ない日を

どうして居座ったまま待っていられよう

なぐり殺された親父たちの魂を呼びながら

襲降る中とはいえ起ち上がって叫ばなければならぬ

襲降る中とはいえ起ち上がって叫ばなければならぬ

- (1) 山水甲山——中国の東北地方と国境を接する地名、名だたる山間僻地。もつともひどい流刑の地。
- (2) 黄龍江——全羅道をなされる川の名。
- (3) 長城——全羅道にある地名。東学の乱と呼ばれる農民蜂起にかかわる由緒ある地。